

### ▲焼土遺構 (仮番号65-001) 江戸時代

小さな塚山の上にあった焼土の遺構で、内側には礫の大石が落ち込んでおり、元々は葺石のようになっていた可能性があります。遺物は、寛永通宝が塚山から3点、焼土遺構の中から火を受けて脆くなった古銭が9点出土しています。石に混ざってカワラケが5点出土しています。この付近には、「荒神山」という地名があることから、焼土遺構と関連があるかもしれません。

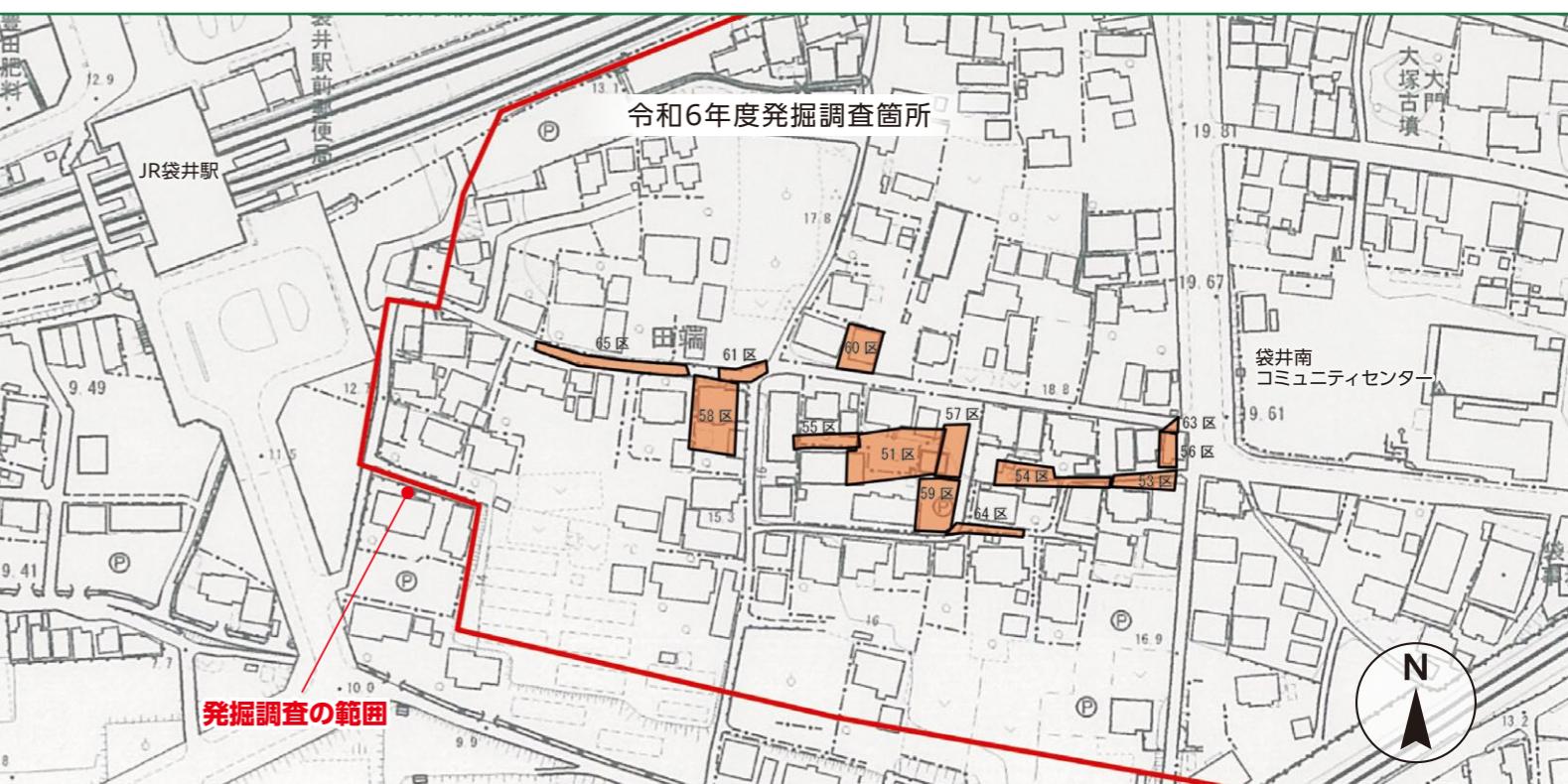
### 令和6年度の調査まとめ

大門遺跡の発掘成果により、この地では弥生時代から現代まで集落が営まれていたことが確認できました。さらに、一部では衣食住の痕跡や、人が生まれてから死ぬまでの通過儀礼の痕跡も見つかっています。これは、田端地区が昔から安心・安全で住みやすい土地であったことを示すデータと言えます。



# 令和6年度 大門遺跡 田端地区 発掘調査

大門遺跡は、JR袋井駅の南東に広がる大規模な集落遺跡です。遺跡の営まれた時代は、弥生時代、古墳時代、中世、近世、近代にいたる複合遺跡です。周辺には掛之上遺跡、団子塚古墳群、大門大塚古墳、地蔵ヶ谷横穴群等の袋井市の各時代を代表する遺跡が分布しています。地理的環境として、遺跡は小笠山から西に伸びる丘陵の最西端付近にあり、近くを流れる原野谷川を仲介して太平洋に出ることなく内海で磐田方面と舟でつながる潟となっていました。さて、発掘調査では、竪穴住居跡、方形周溝墓、溝跡等の遺構や、土器や石器等の遺物が発見されています。



# 令和6年度の代表的な調査区

令和6年度は、第51区、53~61区、63~65区の13の調査区が完了しました。ここでは、代表して第51区を紹介します。さて、写真の中央には「方形周溝墓」と呼ばれる4本の溝で四角く囲まれた弥生時代の埋葬施設が検出されています。さらに近くの穴から古墳時代の「土器棺墓」も発見されています。調査区の南側からは小判形をした「竪穴住居跡」の半分が検出されています。このうち「方形周溝墓」は、弥生時代にこの集落では指導的な立場の人が埋葬された施設です。一方、「土器棺墓」は古墳時代に死亡した幼児等を埋葬した場所と考えられています。「竪穴住居跡」は簡易的な住宅で地面に穴を掘り窪め、その上に茅や藁などで屋根を葺いた質素な建物でした。建物内は暖房や食品加工のために炉を作り火を焚いたため土が赤く焼けた炉跡が複数検出されています。同じ場所に何軒も住居を建て直しているのは、近くに飲料水に適した水が湧き出る地層があるため、同じ所に人々が住み続けたと考えられています。



▲土器棺 (仮番号51-200) 古墳時代

土器棺墓は、直径23cm、深さ28cmの小さな遺構で、穴の底部から古墳時代の小さな完形の甕が1点、底を上にした形で発見されました。当時、死産等であった場合は小さな土器に入れて埋葬したと考えられています。



小型の丸底甕 (古墳時代)



▲石器ピット (仮番号64-053) 弥生時代

この遺構からは、同一個体と思われる4点の弥生土器の破片と、石器5点が出土しています。土器、石器共に短時間で埋まったと考えられ、すべての遺物は同じ頃に使用されていたと思われます。1~3はナイフ形石器、4は石錐、5はスクレイパーです。何らかの作業をするための石器でしょうか。



▲土器棺 (仮番号64-054) 弥生時代

壺と高坏の合口の土器棺は、南北2.41m、東西1.32m、深さ26cmの長方形の土壙から出土しています。遺物取上時の確認では、壺形土器を身にして高坏形土器を逆に蓋として発見されています。ここからナイフ形石器が1点出土しています。土器と石器は何かつながりがあるようです。



▲土器溜まり (仮番号64-055) 弥生時代

弥生土器が集中して出土した遺構は、複数の方形周溝墓の溝跡が重なった場所であり、これらの土器は溝跡の窪地に静かに投棄されたように見え、破片になつても土器の形を留めるものが多いようです。



石製の工具セット (弥生時代)



ナイフ形石器 (弥生時代)



小型の壺 (弥生時代)